



体験したことは身に付く

校長 垣崎 晃

長い休みが終わり、学校に子どもたちの歓声と笑顔が返ってきました。「校長先生、ぼく、家族で田舎に行ってきたんだ。とっても楽しかったんだ。」「私は、川遊びに行きました。水が冷たくて、とても気持ちよかったです。」などなど、一人一人が大切な思い出を話してくれました。

夏休みの経験や2学期の体験活動は、子どもたちの力となることでしょう。ただ、そのことが大きな影響をもたらすか、単なる思い出に終わるかは、これからの生活のしかたにあるのではないかと考えます。

「聞いたことは忘れる、見たことは覚える、やったことは分かる。」とよく言われます。この出展は、『荀子(じゅんし)』 儒効(じゅこう)篇の「不問不若聞之、聞之不若見之、見之不若知之、知之不若行之」(聞かないことは聞くに及ばず、聞くことは、見ることに及ばない。また見ることは、理解することに及ばない。しかし理解することは、それを実践することに及ばない。したがって学問は実践の段階にまで至って終わるのである)です。体験活動の大切さ、また実践できる力を養うことの大切さをよく表していると思います。

体験にはさまざまなものがあります。原(げん)体験、自然体験、社会体験、奉仕活動体験等に分けることもあります。学校生活の毎日も新たな体験活動があります。学習体験もその一つです。休み時間に友達と遊ぶこと、給食の準備をして一緒に食べること、掃除の時間に教室や学校の中をきれいにすること。まさに、毎日が体験活動であり、その中で、子供たちは人間として必要なことを学んでいます。学んだことを知識として蓄えることは目的ではありません。今求められている力は、学んだことをもとに、自分で考え、想像し、実践していく力です。実際の段階では思考錯誤を繰り返し、失敗することも多いでしょう。逆に失敗の数だけまた成長していくのかもしれない。

体験したことを身に付けるために三つの大切なことがあります。一つ目は、その体験のめあてをしっかりとつこと。ただ何となくやってみた、こんなことをやらされた、では何も身に付きません。二つ目は、体の全感覚を使って、「なぜだろう、どうしてだろう」と問いかけをもって考えることです。自分なりの考えをもち体験することで、より深く自分の力となります。三つ目は、さまざまな体験のなかでの人との関わりを大事にすること。一人ではできないことも、力を合わせればできることがたくさんあります。力を合わせてできたことは何よりの宝になります。

子供たちの体験したこと、これから出会うことがしっかり身に付けられるよう、指導支援していきます。2学期も本校の教育活動へのご理解ご協力をよろしくお願いいたします。